

# 蔵前テニスクラブ

1969 **13**号

東京工業大学硬式庭球部

## 目 次

1	雑 感 .....	染 野 檀 .....	3
2	奮起せよ .....	牧 島 邦 夫 .....	6
3	雑 感 .....	村 上 博 .....	7
4	雑 感 .....	山 田 恵 一 .....	11
5	'69 コートの秋 .....	田 村 敏 昭 .....	13
6	雑 感 .....	湊 隆次郎 .....	14
7	昨年及び今年の成績 .....		15
8	リーグ戦観戦記 .....		25
		板 橋 博 康 .....	25
		長 島 清 司 .....	27
		関 根 真 応 .....	30
		西 野 泰 蔵 .....	31
9	「O・Bは語る」 .....		32
	低迷を脱したい .....	神 武 昭 彦 .....	32
	O・B戦雑感 .....	平 井 満 夫 .....	37
	テニスと卒業後43年 墨 .....	金次郎 .....	38
10	「4年生の創作」 .....		40
	捨てボンの奇跡 そして .....	軟 派 亜 腕 .....	40
		(石黒 稔)	
	錯乱・分裂・混沌 .....	相 田 康 幸 .....	44

11	「一年生から見たテニス部」		
	入部して .....	住谷吉男 .....	46
	硬庭クラブ入部前後 .....	中村良雄 .....	47
	入部して5ヶ月 .....	西江誠 .....	49
12	日誌から .....		50
13	特別手記		
	テニスというスポーツ .....	山岸二郎 .....	54
14	決算報告(昭和43年度) .....		57
15	編集後記 .....		58
16	会員名簿 .....		59

## 雑 感

部長 染 野 檀

1 紛争： 一年に唯一度、このような文章を書かされる。苦手だなあとつくづく思う。数行といえども苦しい事だ。楽しい事なら誰でも書ける。

一年を振りかへるまでもなく、苦難の一年であった。そしてまだまだこの先も苦難に満ちているのであろう。それは大学も、また我がテニス部も！。

テニスの部誌に大学紛争に関する意見を述べる考えは毛頭ない。然し紛争が部活動なり、吾々の教育、研究の上に重くのしかかってきている事も亦事実であろう。紛争中の苦しい時に、テニスマンは試合最中の苦闘を思い出した人もあるであろう。筆者もその例に漏れず、何度かどうにでもなれ！ と思はずにはいられなかった。然し、どうにでもなれでは勝負には負けるのだ。自ら戦機をつかみ、勝負に持っていかねばならない。自分自身に先づ勝たねばならぬと感じた時、おのずから解決の糸口もつかめようというもの。

思うようにテニスの練習が出来ない。腕も落ちたなあと思う。然し最近ではコートで元気にテニスをしている諸君の姿を見るようになって、どれだけ勇気づけられる事か。

2 執念： 筆者はテニスには全くの素人だ。全くの新米である。練習について兎や角いえる芸も腕も持ち合わせていない。唯過去のささやかな経験を通していえる事は、よくいわれるが"執念を持つ"ことである。あいつは最近腕をあげた、とあってよく観察してみると、実によく考え、そして努力を重ねている事を見出す。工学部に属する我々には練習に恵まれているとはいえない。然し反面、テニスコートが四面、学内にある事は非常に恵まれていると云わねばなるまい、一寸のひまにもその意志さえあれば練習は出来る筈である。

もうOBになったが、かつてのキャプテンの増山君が、2年生当時朝早く、ポリバケツの中に一杯のボールを持ち出して唯一人黙々とサーブの練習をしていたのがまだ眼底に焼き付いて離れない。相手もなく唯一人ボールに打ち込むには非常な努力がいる。然しよく考えてみると一人であろうと二人であろうと同じ事だ。対手があれば都合がよく、かつ勇気づけられる事は事実であろう。然し自分一人ではできない事はないのだ。テニスは元来孤独である、人生はまた同様に孤独なのである。自分自身に対するたたかいである事を忘れまい。

今年のウィンブルドンの試合で老雄ゴンザレスが延々5時間に及ぶ熱戦の後、勝利をおさめ、最近の全日本でもあの小柄の倉光選手が5時間半の苦闘の末の勝利を報じている。洋の東西を問わずその気力、その執念に全く敬服する。勿論充分なる練習により培われた結果ではあろうが、我がテニス部にもこの執念の不足をなげくのは筆者ばかりではあるまい。

3 練習 : 強いものが勝ち、弱いものが負ける、これは当然な事である。その当然の事を何とかすることは出来ないか。

戦争が大好きな筆者は、本当の戦争ではない、戦争の歴史である。誤解ないよう … 中学時代から六韜、三略、孫子の兵法を読みふけた余りに度が過ぎて親爺より禁読令が出されるや、根が親孝行であるので公然と読むことはやめて、夏はカヤの中、冬は寝床の中に持ちこんで、そうでなくとも薄暗い田舎の百姓屋のこと、すっかり眼を悪くし、近視眼になってしまった。しかしその頃の勉強は最近に至りようやく実を結び、大学紛争に、テニスの試合にも！と思っているのだが、理論と実際とはとかくうまく合致せぬもの。

閑話休題；対手に勝つには、"敵を知り、己れを知らねばならない。" 残念ながら敵は一人ではない、いろいろの敵がいる。従って自分自身を知り、いろいろの敵に勝たねばならない。然し幸なことにテニスは非常に複雑である。単に体力だけでは駄目だ。練習、それも頭を同時につかっての練習が不可欠である。幸か不幸か筆者も含めて、諸君の多くも必らずしも体力に恵

まれているとは云い難いようだ。あとは頭と練習のみ。幸にして我々はテニスに関する力学については文科の人達より深く理解をもつ筈である。昨年の本誌にのった津村前部長のお話をはじめ、質点の力学の極めて初歩でも勉強して実施に応用することが大切である。これは理論と実験が可能である。

4 転落よさらば。： 牧島教授のあとを引き継いで、部長になって後、毎年定期的に一部づつ確実に転落してきたのに一応終止符を打ち、今年度はからくも入替戦に勝って、現状に留まったのは誠に結構であったの一語につきよう。"どこまで続くぬかるみぞ！"という戦時中の歌の文句ではないが、精神的にも部員全部が萎縮してしまっている。何かのキッカケを自らつくって、勝機を得る努力が人生には必要である。現状維持でも何でもよい、これをきっかけにいよいよ明年より上位躍進の年にすべく、決意を新たにしようではないか。

## 奮 起 せ よ

前部長岐阜大学 牧 島 邦 夫

工大を去って2年半、ときどき帰京したとき誰もいないコート横を歩いていささか淋しい気持がする。紛争中のこととて仕方がないとはいうもののテニス部にとっては最悪の状態に追い込められたものである。

小生この田舎大学へ来てから半年位で顧問にされ、創立日の浅い部に強力なハッパをかけ遂に今年は三部から二部に昇格、この調子なら来年は一部に昇格できると思っている。当地は一部といっても工大が四部にいたときの実力位なものである。そのうち当チームを引きつれて工大に一戦をいどみたいと思っている。

工大は遂に六部に落ちたとか、練習不足のためかとも思うが、強くなってもらいたいものである。これは先輩のいつわらない希望であろう。

小生工大にいた時とくらべると大分腕が落ちたようである。練習不足のため足が弱ってしまった。去年国体の岐阜代表になって静岡とやって負けて遂に福井にゆきそこなった。また都市対抗でも愛知に負け、このところ自信をなくしている。練習ができないのが何といても一番いけないようである。部の練習のときに出てゆきたいのだが何かと学校の雑用に追われて時間が無い。前だったらテニスをやる暇だったら強引につくったものであるがどうもそうゆかなくなってきた。年のせいかも知れない。

何はともあれ、諸君の奮起をうながしたい。諸君の先輩は実によくやった。その先輩達のいうことをよく聞いてみるとよい。気持の持ちようで随分違うものである。 ガンバレ

## 雑 感

前主將 村 上 博

今年を振り返って一番始めに思う事は、やはり強敵理科大によくも勝ったという事。この事だけですべてが良しと錯覚するほど今となってはリーグ戦が相当な重みを持っていた事を認めざるを得ない。他の試合ではとても味わえない雰囲気、苦しさ、そしてそれを上回る快感を。

1、2年の時、実力では相手に劣らないものを持ちながら、走り込み不足や concentration、チームワークを欠き、その事が結局、運に見離される結果となり、もう一試合、いやもう一セット、いやもう一ゲーム取れていたらというくやまれる結果を招いた。こういう反省のもとにスタートしリーグ戦を目標にするというよりは、走り込み concentration、チームワークという事を自分としては狙っていた。

一年生の体力に合わせて合宿前はトレーニングはスローにスタートしたが合宿後、練習の前後にマラソンをし、十分走り込んだ。又今年は国公立、理工系などの試合の当番校であったが、上級生の人数が多かったので仕事を振分ける事ができ、その様な事が、かえって良かったのか上級生間では活発な意見の出し合えるムードを生んだが、上の方の団結に甘んじ、下級生との意志の疎通を欠きがちになった事が心残りである。

さて、いざ試合となると、自分としては夏の好成績で、かなり自信を付けたのに、秋になり慶応のチョンボに負けて以来、全く崩れ、ダブルスまで、スカットした試合運びをする事ができなくなり、結局自分がいわゆる"ダントツ"にならないまま終ってしまい、対抗戦でよく負ける一番の原因になってしまった。(一人抜群の奴がいれば大へん楽なのだが)。相手校と実力は大きく変わらないのに敗れるという従来の繰返しが又行なわれ、その度に川上さんを始め、先輩から勝つ気が感じられないと言われ、当初の目標であった



concentration の欠如を認めないわけにはいかなかった。敗戦の繰返しになると、どうしてもムードが悪くなり義務的にゲームを行ってしまいがちで、この事は現 3 年生もよく気を付けてもらいたい。

自分としては秋の対抗戦でシングルス 4 ポイントをとって勝っている神奈川大にはよもやリーグ戦で敗れるとは思わず、次の上智大の一日目のダブルスで惨敗した時は、選手も応援も全く concentration に欠け、最悪のムードを変える事に気を配ったが、多摩川の川原での meeting、又熊本さんが練習に来られたりで、久しぶりに熊本氏にハッパをかけられて気分を変えて練習できたのは、今考えると非常にラッキーだった。結局最後の入替戦になって、concentration、チームワーク（特に応援）それと相手を上回る脚力（決して技術ではない）が一体となって勝利した、いや運を呼び込めたのだと一人合点している。

最後に現 4 年生に対するテニス及び人物評で、1 年間指導グループとして活躍した（？）オンマツを水に流すとともに 1 年生に対する紹介も兼ねたいと思う。

理論の先走りか伸びなやんだが理工系リーグの委員長としてそのお口は大いに役立ちテニスの方もあと一年の特典を生かせればレギュラーの道も夢ではない。許せ相田様、

1 年の時の彼を見ていたら、サービスなどは音がしないし、スマッシュなどは言うまでもなかった。その彼がよもや強くなるとは考えられなかった。不可能を可能にする男。1 年生に希望を与える男、マージャンをやりたくても誘われるまでしぶとく待てる男。（ああ、これだけゴマすれば真実味がなくなるね）これが飯田様、

フォームは良くないが何故か理にかなっているらしく良い球を打つ。又酒ぐせが悪く、酔った奴の看護はするものではないとぼくに決心させた男である。当然石黒様、

典型的な長男タイプでテニスではそれが弱点になってしまった。彼には他人を負かしてやるなんていう残酷な行為はできないのだろう。やさしい内山様、

休み方がりまかった。よって一番各地を旅行しているのが彼である。テニスの方は社会人になってからやるつもりらしい。適当にやりたい奴は手本とすべき人物。怒るな大輪様、

彼をみてテニスは貴族のスポーツではない事が証明される。又いくら調子が悪くても彼と試合をすると不思議に強くなった様を気にさせてくれる人徳の持主で、あと1年間頑張るって他の人の為に役立ってもらいたい。言いすぎた、岡本様、

普段の彼から想像もできないが(悪く思うな)、コートに立てば Mr. Dandy に一変する。テニスの素質という面では4年間で唯一人、一目置いた男である。家では王様の様にふるまっている。妹が可愛い小倉様(関係なかった)

不言実行とは彼には無関係な言葉、どうしても腹にある事はしゃべってしまう。一年の時の怠慢がたたき、三年の猛練習(?)も6の壁の前には屈服するに至ったのは不運。愛される柏木様、

試合をやって勝とうとは思わないなどとほざき、マージャンにおぼれた。熊谷組で飲む、打つ、買うと三拍子、その上大威張りしている姿が容易に想像される。四暗刻の塩見様、

名物男でいつもマージャンは俺が一番強いという顔をしていた。下級生の目付役で彼の存在価値は大きかった。怒鳴られた経験がある下級生が多いだろう。運動部会委員長滝田様、

あのフォアストロークでもリーグ戦ではごまかし切るだけの自力がやはり彼にはあった。それでリーグ戦では選手側のヒーローの一人となった。参考までに下級生は彼のまねだけはやめた方がよいだろう。別世界の人と思うべきだ。自称アッシュ 田中様、

テニス部一のオシャレで彼の外見のアンバランスさを作り出している。練習もしないのにいつも真黒。彼もジャン荘に奉公した一人だが、ぼくの感じからすると何か不気味で一番恐いジャン士であった。苦勞人田山様、

テニスのセンスもいいしパワーもあるが concentration に欠け期待していたのにレギュラーの壁は厚かった。クラシックを愛するという夏井様

天は二物を与えず。フォームも豪快、すばらしいボールを放ったと思った瞬間ボールが返球されもう2バウンドしている。走るのを忘れた男、ニヒル新沢様、

情緒の安定に乏しく、突然やる気をなくして簡単に試合をすてる事数回。これからは物理の専門書をロマンチックな文学書に、置換える事により飛躍が期待される、学者光井様、

何といってもよく1年間全力投球した。下級生に対する信頼もあったし、キャップとマネは互に補完作用があるらしい。彼の入社によりホンダも10年後はだいぶイメージチェンジを強いられるだろう。言わずと知れた山田様

最後に残った一人。自分の予定ではもっともっと強くなるはずであったのに予定は未定、悲しいかな一山いくらに終わってしまった。今思えば2年生の時の精神的スランプ(ちょっとオーバー)により練習を熱心にしなかったからだ。強くなるには3年間しかないのだから持続してしかも濃くやらないとダメだ。このわかりきった事を今実感している。情ない。

以上良い事を書くつもりがつつい本当の事を書いてしまった。毒舌悪言を許されたい。

尙来年度の飛躍を期待する。

## 雑 感

前主務 山 田 恵 一

### I

1月29日以来の無期限ストが、いまだに解除にならず、講義も実験もない為に、我が庭球部は連日猛練習を重ねている。例年ならば、私達4年生は卒研の準備できりきり舞いしているはずなのだが、今年は43年度の後学期試験が終らないため、研究室の所属と言っても仮所属で、現役を退いても他にする事もあまりなく、旅行に行き、アルバイトをやり、最近ではそれにも飽きて、日が傾いて涼風が吹き始める頃になると、三々五々、テニスコートに集まり、テニスはあまりやらないで、麻雀に行ったりダベったりしている。

### II

昨年度は、2度の大雪の影響もあって、コート掘返しは1ヶ月以上もかかり、この間あちこちのコートを借りてまわるといふ破目に陥って、リーグ戦直前の事として大慌てをしたが、これ以外は、国公立体育大会の当番校だった事と、前々主務の田村さんが現金をかなり残しておいて下さったおかげで、経済的には特別な苦勞がなく、17名という多くの同僚の協力もあって、まずまず無事に主務の任を終える事ができた。

さて、1年間の活動の総決算とも言うべきリーグ戦も、秋の対抗戦の結果では優勝の可能性も多分にあったのが、何となく3連敗してしまい、遂にリーグ戦10連敗という、不名誉な記録を作ってしまった。しかし、入替戦では、これまでにない、すばらしい応援の盛り上りを見せ、秋の理工系リーグ戦で3-6で敗れた東京理科大を5-4で降して、辛うじて6部を維持することができた。ここで特筆すべきは、これ迄、何かにつけてダメだダメだと言われ続けてきた旧2年生が、下級生をリードして、すばらしい応援をしてくれた事だと思う。これを機会に"為せば成る"の意気で、5部復帰を目指して、1年間頑張ってもらいたい。また、今年のリーグ戦は紛争校が多く、

東京外語大は全試合棄権して戦わずして5部に転落したが、一方、東大が主将岡橋の強烈なリードによって、遂に中央大を破って、2部に昇格した。この東大の例と、5部で最下位となった教育大が、例年通り、ほぼ実力通りのオーダーで、6部優勝の上智大を7-2の大差で降し、5部を確保した事の2つからは、大いに学ぶべきものがあると思う。

### III

ところで、毎年部誌を御送りするのと一緒に、先輩諸兄に蔵前会費の御支払いをお願いしており、昨年は春合宿を行う為に、大学の近くにお住いの方の御宅に部員が伺ったり致しました。ストライキの為に春合宿を中止せざるを得なかった事と、部費を値上げした事、新入部員が多かった事などの為に、昨年は経済的には比較的楽で、振替貯金にも手をつけずに済みましたが、学連でのボール代の支払いが、一昨年から即金になった事、ニガリヤ砂等の価格が急激に上昇している事、交通・通信費の増大等と併せて、ストライキの影響で、校費が出る見通しが立たず、学友会費も新入生からの納入がほとんどない状況で、新入部員も約20名と、例年の約3分の1ですので、今年は近年にない経済的危機となりそうです。是非共、先輩諸兄の御支援を賜りますよう、現役に代りまして御願ひ申し上げます。また、最近転居されて、郵便物が届かなくなってしまった方が増加しております。部誌の住所欄が空白になっている方の御消息を御存知の方は、御手数とは存じますが、是非、部まで御一報下さるよう御願ひ申し上げます。

末筆ながら、この1年間、何かと御援助、御指導を賜りました、染野先生はじめ諸先輩方、並びによく協力してくれた旧3年生、現役の諸君に、心から御礼申し上げます。

## '69 コーットの秋

主将 田村 敏昭

学園紛争が続く中で四月役員交代が行われ我々がクラブを運営することになった。実のところ当初は全く先行きが心配だった。というのは第一に戦力の実質的低下が明らかであったし、第二に紛争状態の中では十分に練習ができるだろうかという懸念もあったし、さらには執行部内部の造反的いざこざもあったからだ。しかしいざふたを開けてみると、七月半ば頃まで十分にコートが使えたし、内部的統一もうまくいった。何といても好きなだけ練習できたのは幸いだった。ただし練習量と上達度が比例してくれればありがたいのだが、非弾性体的ストレス・ストレイン分布に振動が加わったような状態では、はなはだ複雑である。ただ救いとしては破断がないだけである。

夏休みを過ぎる頃からようやくメドが立ち始め自分なりに満足のいく戦力が確保できるようになった。このじわじわときいてくるところがテニスのたまらない味だ、という人があるが同感である。即座に何かを駆逐してしまう現代にあってはまさに希少価値である。だからこそ我々はさらに練習を積み重ね、みがきをかけなければならない。これがテニスマンとして付加されるべき義務である。

この義務という言葉、何となくうさん臭くいやな感じである。それはこれが拘束力をもっているに他ならないからである。これを何とかはずして自由になりたいとはだれしも思うところであろう。ではどうしたらよいか——アクティブに行動すればよいのである。人間パッシブな状態ではテニスだって学問だって面白いわけがない。面白くないものをいくらやったって上達するわけがない。当然至極である。アクティブな行動力の源泉となるのがいうまでもなく「そのものに対するパッション」であろう。つまりテニスをやりたいくてたまらないという内部的な強い欲求が必要なのである。

こういふことを言いと、中には「何だかんだ言っても結局はうまくならな

ければパッションなんてもてるはずがない」と反駁する人が出てくるが、この理屈もある意味では当然である。だがよく考えてみると漫然と何の工夫もない練習でうまくなるはずがない。これは断言できる。だから自分なりに工夫努力しわずかながらも確実な進歩をパッションの一要素とすべきである。練習する人の心的態度がその人自身のこれからの道を象徴するのかもしれない。——さあテニスをやろう！

## 雑 感

主 務 湊 隆次郎

テニスの試合というものは、決して技術と体力だけの勝負ではない。そこにはそれよりももっと大きな比重を占める精神力というものが微妙にからんでくるのである。

勝つと思ってあげているロブは、深いところにはいるが、負けるんじゃないかなと思ってあげるロブはバックアウトしてしまう。

ある高校の教師が、受験を目前にした生徒を前にしてこう言った。「君たちは実力が無いのだから、それを自信でカバーしなさい。自信があれば大抵のことは出来ます。」この言葉を信じて東工大の入試を自信だけでパスし、テニス部に籍を置いているものもいる。(彼は入試の時と同じ様に、自信をもってテニスをやればきっと強いにちがいない。)

では、自信をつけるにはどうしたら良いのだろうか。鏡に向かって、「君は実力があるんだ、君はテニスが上手なのだ。」と自己暗示にかけるのだろうか。そんなことでは決してない。厳しい練習を積み重ねて行くことによって、俺はあれだけ練習したのだからだれにも負けないんだと、自然に自信がつくものなのだ。練習の伴わない自信は、自信でなく自己暗示なのだ。

もう一つ、精神力とテニスの例を上げる。弱い弱いと言われていたある男が、クラブのキャプテンになってから、急速に上達し他の者を全く寄せつけ

なくなりました。もし彼がキャプテンにならなかつたら、平凡な一部員で終わってしまったらう。それを実力No.1にしたのは彼のキャプテンとしての自覚であらう。なんと精神力のたくましいことか。

運動部の目標の一つに精神力を養うことがある。その精神力を養うためには厳しい練習が必要であり、その中からテニスに対する自信もでてくるだろう。ついつい自分に甘くなってしまうのを、お互いに厳しくしあうことによつて防ぎ、自己に厳しくしてこの一年間クラブを続けて行くことによつて、必ず「何か」を得るであらう。

## 昨年及び今年の成績

43年度

### 1. 理工系個人戦(ダブルス)

決勝(於:東工大)

○村上 6-2 後藤  
小倉 6-4 鶴丸  
(農大)

シングルス

No.3. 飯田 4-6 立花○  
田中 5-7 大沢○

No.1. 2-6  
○村上 8-6 高田  
6-4

### 2. 関東理工系大学リーグ戦 第1部

第1週 10月10日(木)

於:農大コート

対:東京農業大学

東工大 2-7 農大

No.2. 内山 6-8 大沢○  
3-6

No.3. 岡本 1-6 柴口○  
2-6

No.4. 4-6  
田中 6-2 今関○  
2-6

ダブルス

No.1. 村上 3-6 高田○  
小倉 6-8 今関○

No.5. ○小倉 6-4 星  
6-4

No.2. 内山 1-6 星○  
岡本 3-6 柴口○